

戦後型階級斗争の破壊を乗り越え、全学斗運動の更なる発展を踏まえ
自らの力をより根底的に鍛え上げよ！

（我々は自己達の生きている現在と決して完全に同時代にいる事はないードフレ）

はじめに

「70年代奴才斗争が一見華やかな、そして余り聞き慣れない耳新しい言葉の響きとその乱舞のうちに、何時の間にかインフレを起こしてしまった現実にはその主要の内里を裏抜けこぼしている。そこで遂には「奴才斗争」の何處で「あるべき未だ不明確なところ」「奴才問題」云々を叫ぶるといった、全学斗内部での諸々様な混乱をも結果としている。今日の学生戦線の最先頭に立ち、これを領導せんとする我々全学斗は、今こそ、又残念ながら況を再度真剣に検討しなれば、「奴才問題」における我々自身の基本的な視点を大家の前に充分に明らかにして dynamic な M を即ちに展開していく必要に迫られている。そして又我々には大家に対するそれだけの責任があると考える。

以上の様な要請に基き、以下、戦後型階級斗争の根柢と、更には全学斗 M の成果（飽くまでもその一部、一面の側面的評価に過ぎないが……）を踏まえつゝ「奴才問題」への若干のアプローチを試みたい。

諸君の討論の町を踏み台となれば、それで目的は充分に果せたものと考えている。
多くの批判を期待つつ……。

2 戦後型階級斗争の破壊

基本的

今更、言つまでもない事ではあるが、我々は資本社会の特徴や商品經濟を媒介に、經濟的取扱程とその暴力的維持組織とが所謂、經濟的階級と政治的階級＝國家として分離するところにあることを何よりもはつきりと述べておかなければならぬ。初期 Marx の言う、所謂、政治的國家と市民社会への社会の分離である。ところが、市民社会＝經濟社会に於いては經濟的利害を基による諸階級、諸階級が自分達の特殊利害をめぐって相対化し、相互争っていふのである。したがつて、議会政治体制などは、安定的に定着すると、普通には、この市民社会内部に於ける諸階級の政治＝經濟斗争は、彼らの議会代表部を通じて、議会内政治斗争に Bt 的一挙的に集約され総括される。又、ものとして議会は Bt 对会内部の諸階級、諸階級の種々な特殊利害の対立を体制的に調整する為の政治取引所となるのであり、これに反対する議会と合法議会政党の役割は他ならぬ。そして今日の日本帝日主の様に、労働者階級の基幹部隊の工部会、労働組合に組織され、労働組合が市民社会内部の最大の組織勢力として登場してみると、この市民社会内部の政治＝經濟斗争の一切の主軸が、労働組合と資本家団体との間のなれ合い交渉によって占められる様になつてきヨリ、これに対応して議会も又、この組合労働者と資本家団体の間の經濟斗争を体制的に調整し統治する政治取引所へと堕落するのである。

部分的にはセヨ、資本主義の安定を積極的に支持した最後の反革命勢力は、社民諸改良政党と合法 Marx 主義共産党として改良主义・經濟的労働組合指導部であつた！

ところで、日本における戦後の民主主義体制は決してBr議会体制一般では有り得ない。それは日本における戦後革命(危機)をめぐる激烈な階級斗争の特徴や史的な共物とのこの設立政治体制に任せならない。日本においては戦後階級斗争はPr階級の敗北に終り、戦後革命(危機)はBrに屈服されといった。

（又）此ら諸君、我々はここでもう一步考察を進める必要がある。即ち、日本における戦後革命（Prの敗北）は、たゞ1930年代にドイツのPr階級がNazismをもつてした戦後一階級組織を完全に殲滅させた、といふ意味での全勝敗北——ではなく階級組織の基礎部分を維持・温存したまま、資本主義体制の限界内に立、後退させていったという意味での敗北にとどめたという事を。従って日本における戦後民主主義とはこの様にして戦後革命をめぐる階級斗争＝半勝敗北（あえてこう呼ぶならば）となる。なぜか曰く、なぜ日本人は組織的斗争をめぐる労働者階級を、組織的經濟斗争と設立的政治斗争（取引引き）を仲立ちにこゝBr体制限界内に足場にいいたところの圧力団体的取引引き政治体制以外の何物でもない。

そして日本共产党は戦後のBr勝利に対して何ら抗う事なく敗走した事によって擬制の革命党＝革命党のノーブルBr議会政党として名を立てる事は自明である。反革命日記は取みながら70日の京都労働争議に吁びをこめ社会党に社統一軍團なるものを押しつけ、社会党や中道派との同盟を通じて既成のBrの家内力一軍隊、政治公安警察、官僚からなる中央行政執行力——との「法と秩序」の同盟を平然と行なっている。そして日本帝國主義が各資本主義同様、深化する世界資本主義体制の崩壊とその下での激化する国际競争（たゞは日独競争や激しいdumping競争等々）を耐え抜く為にBr人民の收奪強化を絶対に必要としているのであり、それは又日本帝國主義とてこそこれであり、「法と秩序」の執行力の独裁も強化する以外にはないのであり、従ってある人民戦線と既成のBr官僚力との「法と秩序」の同盟に結局、欧洲の各人民戦線の軍命を端的に諸君にてして、はるかに行政執行力独裁による收奪強化に連帶し、それにPr人民を屈服させる事を意図するものに他ならぬのである。

日本の戦後擬制民主主義体制は既に明らかに崩壊のきこしをみせており、そこから組合的詔勅的取引きと稱上げる行政執行力独裁が急速に成長し、仏5月革命に際して「秩序or混乱」といってドゴールの声は今や世界Br支配階級の合言葉となりつつある。そして日本共产党を始めとする先進日合法正統民主主義政党は1968年仏5月革命を手始めに、今再び、Pr反乱の前に危機に立つBr階級の為に、ある執行力の独裁、「法と秩序」の防衛隊を自ら買つ出ようとしている。そこで戦後民主主義擬制の危機に固有不可避なるfascismといふ新しい政治力学を何等理解出来ないでいる。65年日韓空約締結以降、日本帝國主義はより具体的にfascismに向かひうとしているといふのは、……。

Br官僚をPr階級斗争を「現状を破局と混乱と」と、う執行力の独裁の恫喝でもって「法と秩序」の体制内部に足場を得る根柢、或いは、Pr改良党-Br的合法政党の成立根柢の更なる充実に關しては「階級榨取と階級支配の關係が現象的・形而上に口互いに自由平等な商品交換關係によって全面的に被かれている」という事を簡単に指摘しておきたい。しかし確かなBrの家内はその「法と秩序」の体制の中に、近代Prの大規模な組織的階級斗争を日本・市民官僚の助け、更にローワー階級の援助を借りて現象的に、平和的に口互いに得るけれども、実質的には況ては到底得られない事をほつきりと立てねばならない。併し内閣を象徴とする現在の日本Br体制は、詞句・組合取引きを稱上げに、「法と秩序の威厳体制によつてPr人民の收奪を强行するものではあるけれども、（改めてから、なん

まだPrの階級組織の存在を否定するものではなく、むろんその存在を前提にし、彼らの組合主義的・社会主義的指揮部と「破局と内乱」の声によき恫喝につき、その事を通じてPr大衆の代理を、この收奪攻撃に対して無力な条件斗争の限界内に押こし進め、それによつて危機を乗り切ろうとするBr的過渡的政治体制に他ならぬ。

そこで現在の日本に於ける階級情勢は1920~30年代に於けるドイツに於けるアーバル体制にも似た半ば敗北したPrと半ば勝利したBrとの間の過渡的均衡体制・過渡的平等体制以外の何物でもない。しかし「一つの時代の終焉、それは階級間の相対的均衡の時代の終りである。そして新しい時代(原文では「他の時代」)の始まり、それは、暴力による解決と、暴力の分配を排する全面階級争争の時代の始まりなのだ」というドブレのこの言葉は我々に来たるハイニ争の指向を指さすものとて含蓄あるものではないだろう。従つてこの様な意味に於けると、60年代に於ける様々な階級争は、まだ戦後型階級争として階級争の第一段階に過ぎず、「革命反革命又生々死々の最終的決着を要求する地平が今我々の前に目に現えて広がる」といふと考えなくてはならない。

そこで、江の事を諸君は、口にさりげなく認証してみるねばならない。即ちPr人民大衆の不満と憤激、そこから生まれる現状打破への革命的energy及び最早通常のBr軍隊の暴力(職業将校团を基軸にして上から下への奴隸主的命令体制)が固められた通常のBr軍隊(治安官警察、特勤隊等...etc)の手に負えなくなつた規模と高々とて横へ拡張し、を持ったヨコ連合時(実はそこまで人民の革命的景況を高ヨリきれない段階に於いて、これは々々あるけれども)このPr人民大衆の争と、彼らの組合主義的・社会主義的指揮部と体制内斗争にヨリ及え、暴約する事で不可能たり。Pr人民大衆に対する彼らの影響力と統制力を麻痺し無力化している時、則ち、今やBr支配階級にとってPr革命を阻止し資本主義体制を行ひる唯一の方法は、このPr人民大衆の現状不満と現状用の革命的energyの爆発を抑止・弾圧するのではなく、むろんそれを覺えたうえ向に暴約にて爆発させ、Pr革命もしくは“Prのヨリ、の仮装をまとつたBr反革命を演出する”などという事だ。(Nazis-民族社会主義労働者党はまさにその典型的である)、数度にわたるBr世界大戦をもこの歴史的教訓である。そして又現在、日本に於ける广範に確立されられてゐる様な市民M・住民M・公害M・recall M・被説...etcに因ること以上の様な志を我々には、ヨリ把握・認証しておかん必要がある。勿論公害争事件我々のinitiativeの下に展開これゝ事は絶対に欠かせない重要な任務である——Brは狡智にたけりる。日本帝日主には百百自の歴史的裏みがある。我々のMはまたその端緒についたばかりではあるまいと.....)

3. 全戦Mの総括

諸君! 60年代後半から70年安保斗争に至る全戦Mの画時代的歴史的廣がまさに「占拠」という斗争形態を生み出し、從來の学生Mの組合形態を一変させ、所謂全戦Mの限界性とは、ヨリ刻Hにして事に他なるなつた事と再度總括はうづはない。但故なら「占拠」斗争は資本主義体制の限界を越え3斗争形態となつてゐる。Marxの資本論が、その全体系をもつて明らかにしている様に、全資本主義体制の

基礎は社会の物質的基礎を成す生産過程と資本と自己自身の生産過程——「資本の生産過程」——とて組織し編成し統制している處に在る。生産過程が資本、生産過程にならざる處に社会の全生産物は資本の生産物となるのであり、従くそれを現実に作り出した労働者階級は自分の労働力を絶えず資本家階級に売渡し、それによつて得られた賃金が自分で自身の労働の生産物の一部——辛うじて彼の労働力を再生产するに足る一部——を貰い居、さながらばならぬのである。（* Lenin は「労働力商品所有者意識」というより思想に立脚して政治主張を組合主義政治として把え、たゞる Br. Ideology と不斷に徹底的に争つた。この一文も決して資本と労働との関係を価値関係＝商品交換関係として把えているものではなく、あくヨーロッパの支配階級提唱した資本家階級総体と労働階級総体の関係として問題にしているのである。従つてオランダのカウッキーももろんの革井共同＝黒田ism・宇野ismとも全く無縁であることを口にせり、斯くて（））×××資本主義国家の法と秩序、及べされど維持する為の全組織基盤が装置体系は、つまりこそ、この生産過程の「資本の生産過程」としての確保と、従つて陽々他の生産手段や人の精神的手段となる学園に対する資本と國家権力の排他的な一大支配と統制を維持する為の本邦に他ならぬなり。従つて占領地といふ争形態はたゞとんでもないに控えな要水の下に手わざようと、支配階級・國家権力にとつては全世界体制の根底に対する反乱と反逆の行為を意味せざるを得ず、彼らの全組織暴力との対決へと追いつまつてゐるを得ないのであり、こうして必然的に武装占領斗争へと發展せざるを得ない。

又ある者はヨーロッパ諸国とおくなれば、自治会決議による学園合法化ライナ（→半非合法的学園占拠）、文豪集会・文豪武装カンペニアテモ（→5.19 学園占拠下武装占拠三日目）と我々の斗争は67年秋から68年初頭にかけての羽田・佐世保・王子成田三里塚斗争もしくは、それ以前の斗争形態へと一見したところ革更り、もしくは停滞していき様に見え乍れども、革更り況してそうではないのである。（勿論斗争の形態は全く問題にしても今更、始まらないな……）。以上の事をみて察ればこれらの斗争形態、もしくは革行と一般的に否定して云ふ事の反対性も又明らかではないだらう。

しかし、我々は一貫に於、12中東奪取化された近代資本主義家の武装暴力に対しては、街頭アインストリートは、たゞえそれが初步的武装斗争に発展するも、政府支配階級の政策に対する実力抗戻の意を表示しに出来るものではないこと、こうした実力抗戻の意表示斗争は、社共・総評同盟・JC=Br. 在戦線別動隊・組合主義・至道主義・合法主義・説会主義、一口字・民衆主義・排外主義=凡ゆる日和見主義一々、従来の様にとりつけ60年安保の如く反安保の文豪カンペニア斗争、アスベルヌトや不風集会・焼香テモ・請願テモ一を組織し、それを対日家政斗争や内閣打仆・政敵交替斗争に繋約するのも、丘陵空き崩こ麻界2セセ阻止させる手段としてのみ主要に有効であつた。現在もススムであるだろう。（勿論、何物とも恐れぬ勇気とでひぐり事のない人間で兼ね備えた優秀な革行を育成する生徒・学校・教練場等もある側面を見落してはならない事も確認しておかねばならない。）

竹ごろや鉄ペイントには即、國家権力を打仆する事は出来ない。往復頭武装斗争の現在的意味とは、つまり總括してわかれないと、それこそ革行の我々に対する左翼人見病、詐欺等と中傷され受けねばならなくなつてしようだらう。

中核を築く頭とする、構なれど 60年代旧新左翼、諸党派は刃問題に突

する明確な視覚が欠落している故に、ある街頭実力の規模と対応性を単に量的にエスカレートする事のみを競い、唯一、それを自らの党派性とこそ自己目的、に固定化したのであり（その戦略的・カンパニア的限界を露呈し、王研ヨーへと重複してしまったのである……）それによつて自分達を対立と単に直接行動に於けるのを乗り越えたに過ぎぬ上べだけの急進実力主義・実力及安保党・政策反対党といふもの、其事を証明したのである。

我々ニコソス又る市民街頭主義諸派を明確に剥り越え、街頭実力斗争をより高次の質を持った革命斗争へと自らを止揚し、それへの進化となつてゆくのはどうぞこゝで、それなくしてこそ又る戦略的・カンパニア的・暴力斗争的限界を超えて得たりのである。我々は常に基本的な革命slogan+を掲げ、その下に人民大衆を領導技術、Brを革命争争の組織へと引るカリスマ、事によつて「戦争なくす正義の戦争」を今さら着々と準備していく事によつて1917年ロシア革命の世界革命への爆炸以後、組合的・議会的政治取引によるPr階級斗争の体制内化を根本的特徴とする現代過渡期世界ともじ通り具体的な階級斗争の歴史として死んでしまつた行方ねばならぬ。

以上の種々な諸点を総括し、結果として踏まえつゝ以下一面的ではあるが全戦Mの再度のストライクへ三點について簡単に整理しておきたいと考える。

(1) 我々は自らの斗争を貫徹しようとすれば、単に支配者階級・國家权力に対するのみならず学園内部のBr秩序派一教授会・日英・日清・石炭に対するも自己武装せざるを得なかつた。学園占拠斗争の中から文豪斗争組織として生成してきた全戦Mは多かれ少なかれ自らを武装せざるを得なかつたのである。更に全戦Mは自治会Mと異なり私的個人の一人一票を基礎に日々事に出来なかつた。それは、文豪の中の先進的活動家部の直接行動から始まり、この直接行動によつて残りの人衆をもMの中に巻き込み、全般的直接行動と組合する方法、先進的活動家による所謂拠点占拠斗争によつて直接行動主義的・全学占拠を組織するものであった。

占拠斗争は（たゞそれと一学園があるにせよ）資本の秩序を破るものであり、それは最早体制内の暴力斗争行為ではなく明らかに反乱行為であり。そして反乱は私的個人の一票投票というBr的組合原理に基づいて組合つれ得るものではなく必ず最初に反乱を決意した先進的活動家の部分的反乱から始まって、この部分反乱自身によつて全体的反乱へと組合つれる他にならなかつた。

(2) 全戦Mは全ての文豪的反乱Mと同様、行動し斗争し反乱する文豪の革命的独裁のMとなつてゐるを得なかつた。我々の従来のMは行動する文豪自身を自ら決定し執行する直接民主主義のMであつたが故に同時に行動しなり、或いは反対行動敵対行動する部分に対する我々の革命的独裁であつた。そして、こうして革命的独裁の論理は当然にも我々内部にも反映されつてゐるを得ない。M参加活動家・文豪自身の一人一票の民主主義に依拠するとは出来なかつてし、又こうして一票投票に基づく固定的な執行部を持つ事も出来なかつた。（全学斗争と学友会組合の区別する分野とにあたる区別連鎖・分離・統合の有無性）。

全戦Mの生きつゝしたdynamicityはMの推進と意志決定は、その中核前行となつ

て活動する中心的活動家団体や行動団体そして最も單身的活動家の組合と交替する直接行動のinitiativeに依拠する他ならなかったのである。

(八) 全斗型組織は必然的に臨時的組織であり自発的組織の様な日常的な持続性・恒常性を有する定型性をハサリ得るものではない。全斗型組織は学園占拠・反乱斗争の中でも生み出された臨時大衆斗争委員会、大衆反乱組織などをあり、従々全斗の反乱組織同様、唯一、大衆反乱の中でのみ、その生み出され再び得られに過ぎないものである。又全斗の反乱はそれを部分的反乱にとまる限り、換言するならば、直接に全社会反乱へと発展しない限り、必然的に一時的なものである。所謂、全斗型組織は、それらが恒常的な組織として定着する為には、部分反乱の継続を通じて、全社会的反乱、一場反乱占拠を含む全社会的反乱の一環へと目を止めて、そうして全社会的反乱取扱い・革命取扱いの一部として自己を定着させる以外にはない。

68年5月の仙台・69年1月の伊丹では学園占拠斗争及び人民衆の大衆占拠ゲートの事件となり、そこには生れ過程を基礎とする労働者階級の反乱の武装自己取扱い・Sovietを生み出し、B・支配階級の反対力と、この労働者階級の武装自己取扱いとの所謂「二重取扱い状態」が出現したのである。とりわけ仙台に於いては3/22以降ナントル分校の活動家たちが反乱斗争に端を発し、5/3-5/10に至る学生を中心とした総力戦でカルチエ・ラタンの大衆占拠戦とナントル・戦にて5/13全斗コロストを契約料1000人で雇用の労働者による反乱とて爆発したのである。その大衆的背景としてはもちろん、日仏通貨体制の動搖による仙台の日仏本店累積の慢性的化に伴う日仏總不況への国民的不満の蓄積が考えられる。革連3/18にはマンハッタン銀行・アメリカ銀行が爆破されたのである。20日にはアメリカンエクスプレス社破壊事件も発生した。

總じて、全斗型運動反乱斗争は積極的部份の消極的部份からの、先進的部份の後進的部份からの、断固たる部份の日和見的部份からの「分離と解放」がここにはあり得ない。何故なら反乱斗争は再度言ふ様に私的個人の一票投票によるB・的多数決や先進的部份と後進的部份の「統一と团结」などから始まり得るものではなく、反乱をする最初に決意して先進的部份が投票箱によつてではなく自らの断固たる反乱の直接行動によって、大衆に反乱をつづつけて、それがよつて大衆と対決し、大衆は反乱行動に連帯する部份と、それに反対行動する部份と、中間的動搖部份とに分裂させ、反乱に敵対する部份との非暴力的・非和解的な斗争を通して、こうした大衆の分離と分裂を徹底的に推進せらるる法、「分離と対決」の手法によつて以外には全斗運動は組織に得なくなつたこゝ維持に得なくなつたのである。あれ程の全国的景況を生み出す事も又出来なかつたにせらる。

そこで、こうした反乱への大衆の直接行動の運動一「大衆斗争委員会・行動委員会」一緒に並んで切り石、二つに全斗運動の初期的直時代的な要素があつたといえるのが何ではないだろうか。……所謂60年代初「新左翼」が、行動前線とこの役割を果して来たのは67年末から68年初頭にかけての羽田・佐世保・王子・成田斗争の段階までである。たゞ全斗による大衆的学園占拠斗争が登場するや否や、たゞてその障害物にと彼らは転落していったのである。

以上や、一面的なヨクルはあらず、簡単に全斗運動の経緯に解かれてしまった。最後に我々の今後の主の指向性と反対問題上閣する君子の考察を討みたいと考える。

4 我々の斗争の指向性と权力問題に関する

しかし、しかしながら諸君、一切は敗北したのである。仏に於いては仏共産党にC.G.T. (General Confederation of Labor) はストライキの為の国家权力との条件交渉に及ぶ事によつて各戦線を分断孤立化させ、一切を組合的設会的要素斗争(取引)へと切り替える事によって起きたPr人民大衆を敗北の極へと追いやつたのである。

一体この事は何を意味するのか。何を我々に教訓として与えてくれたのか……。それも明らかに次の事であるだろう。即ち「Pr人民は自身の所報の中にPrを假装して存在するBr秩序派、組合的設会主義的自由派を徹底的に無力化しこれを解体し尽す事なくこれは、一切、敵-支配者所報、國家权力に胜利がうなづいた事」まさにこれこそがドイツ革命の敗北以降、仏・伊革命敗北を至る今日、歴史の生きた教訓として我々に残されたものに他ならない。

一步を進めよう。

たゞ、且ち従来の先進革命斗争に於ける「工場占拠」→革命的軍事力行使の創出(最も徹底したBr民主主義)→武装一晩蜂起→权力奪取+といふSoviet型革命(今後はどこでハ派(日向)も又そろそろあらけれども、これこそが近代Prを主動とするMarxの言ふ意味での政治斗争→政治权力の為の斗争、革命的权力斗争と自做(20世紀のものである)は当然にも一日もアホ的限界を刻むつたものと云ふ。そこで「革命とは軍事である問題である」という軍事的基本的問題すら忘れられ、人ではさに大家Mへと召還していった合法Marx主義の裏山が道路として敵本部Brの攻勢の前にあえなくもしろじながら当然にも敗北してしまつたのである。自然的儀式は今こそ全般型組織に乗つた所謂反乱型革命M(自然成長的発生革命觀)の検討に負効に着手せねばならぬ。Soviet型蜂起が先進諸名に於いて何に致命的利害をおつめ得なかつたのか! 最も真正な革命戦Iはすでにこのあたりこそ新たな勝利への道を確実に得たのである。

たゞ、その際に次なるには若干の考慮を払わねばならないと考える。

それは今更の不様に言うまでもない「工場占拠」の革命的意義についてである。大衆的工場占拠斗争は大とえ
「事ではあるが」
×いとPr大衆自身が部分的改良的の要求実現の手段一貨上り or 劳働条件改善 or 労働強減の為の斗争手段一と観念ここでいよつともこゝにPr其主義実現のための革命的斗争一Br國家权力に対するPr階級の武装斗争、权力斗争一の原点となり得る点につづいての原則的評価を決して見落してはならない。但故に工場占拠斗争に入つたるや否やPr大衆はBr市民社会の一切の「法と秩序」の組織暴力を真正面から敵にまつづかれて得ないからである。従つて占拠は貴欲によるとされば、このBr社会の組織暴力(自警团、石壁、カード等…ETC全然含んで)に對して自らの斗争と武装自行せつゝを得ないからであり、一(もっとも先にも述べた様に仏五月革命に於いては)ある段階に到達する以前に仏共産党、CGTの指揮によつて労働者は自ら工場占拠、及べハリケードを解いてしまつたのであるが)一従つてそれはPr人民大衆の明日には必ずしも直接的な大衆武装-自己武装の一つの原由となる可能性を秘めているからである。

僕達は今、世界的な革命Mの新たな昂揚を身をもって実験してゐるし、敗北に終った

戦後革命から26年間、東の間にBrの肯定の後再び革命のP。世界革命の現実的可能性を手中にしつゝある。

Lenin 及「帝国主義論」に於いて、いかにも指摘したように帝國主義Brは、その一日もその延命のためにには「資本家 - 労働者」、「帝國主義 - 植民地（人民）」、「帝國主義相互の矛盾」という大きな崩壊要因に絶えず気配り、内部矛盾の調整に奔走せねばならなかったにも拘らず、今又新たに「帝國主義 - 労働者・労働者・労働者群」という決定的矛盾を以て抱え込まざるを得なくなつてゐるのである。（反対の限界）この客観的条件を如何に誤りなく把握し、如何にして主体と準備する、革命主体のこうした実践なしに、そしてその上での階級の結集なしに「革命の現実性」を言ふべき語は、それはMYつの空語に過ぎない。いや、更に反革命がするあるだろ。そこ結果はこうである。即ち革命の現実化、人民の圧殺。帝國主義の革命はこれより幾たびとなく敗北し、その度に敗北を革命戦争の高価な皿によつて賄つて來た。ロシア革命に於てあれ程數狂にPrl所級に革命の性質の度に幻滅を味わひ「革命の現実性」を失はんとするに至つた。(福井田家代行) キー塞スへの労働者の流れ込み、一Bの裏約）。これを偽りなり現実ではないのを、そこで今又同じ敗北を繰り返し、労働者阶级も一旦出口のない绝望と無氣力な自己保身へ追いつくわないと一体誰が保證づらうのか！

まじやPrl衆は社会主義者や其支持者に自らを鉄工所にてPrl革命を開始するというだけのものではない。レフPrl革命は、自分ではそれを部分的生活形式の斗争と見なすと観念して、敵子の教育者の非社会主義者非労働Prl衆自身の直接の行為である。我々はこの事とロシア革命以後(勿論1871年のルミエールも含む)の歴史の事実とては、き詫していふが故に、また、こうしたものとて革命の真実を把握している故に、それはPrl革命成就に主として領導的・前衛主体(單なる行動の前衛、ではなくて真の革命の前衛)の在り様こそ、Prl革命斗争にとって決定的に重要な事で、今更の様に痛感すると同時に(代々主体の弱さ・整備の遅れ等の立ち遅れを謙虚に反省せねばならぬ)と考えるのである。帝國主義の敗北とPrl革命の復讐の復讐ではなくてあくまでも現実を、眼前に進行しつゝある人破局の型とそれを創り出す危機の下での政治力学を誤りなく把握し、更に、それに正しく貿合した主体の配置計画を練り上げ、且度的に追求する事をもって、これに応えよと/or/といふと考える。

現代過渡期世界と世界通貨体制ニドルを世界の中央信用貨幣とシンドをその補助貨幣とし、IMFをその理念体制とする第二次戦後の世界信用体制、の崩壊、即ち反革命体制及びその軍事体操に擁護された世界統一市場形態を基軸とする過渡期経済過程(勿論その下でには大陸戦争戦争は存する=金戦争、金利戦争、為替戦争、貿易戦争、資本戦争)の崩壊による平和共存戦略の固定化→流動化、戦後民主及君主制の崩壊過程での政治力学をみる事を再度確認し、そこで日本帝國主義の眞の実体夏の日、手で形成されるのは、軍隊・政治警察・官僚からなる執行スルリ-官僚・行政・執行権力が、あるいは設会や議会の多数派からなる内閣などといふ二重組織(設会や内閣が国家权力であると思ふ)、五のは、議会選舉による日本の戦後資本主義と打消的に一体化してくる官僚体制を廢棄したり、社会主義力を成立させる事を出来ると言ふ(即ち、信じこまないことに、延命できない平和不祥の設会・組合主義にとてのみ本当にふつわしい法想と言わねばならない。) 従つて、国会や首相官邸へのテナントをも「刃力斗争」である如く鉛錠する事なく、自ら生根力斗争に勝利こうと、効率的武装刃力へと高めて行く事にあり、早急に革命的武装勢力の結集とその戦線の結束こそ眞正の王道への鍵であるだろう。

「70年代初の三争」とは戦後体制とこの本末の世界的生々力に屈従した「連Stalinism」の平和共存体制を崩壊させ、この物質的諸前提と目的意識的に空う前の事によつて、又「3戦後共存体制」の特徴的表現であつて記念民主、主的手段を向うる事なく人民の力とPr.独裁 - 臨時革命政府(革命評議会を含む)とて確立する迄の過渡期の斗争の事に他ならず、されば「革命戦争過程」に於いてPr.を一日的階級にとどまらざる事なく世界的階級(世界的二重性から世界社会主義への成長)へと止揚していく事と相即的である。

従来、P.R.D.は如何なる反帝斗争の「階級統一戦線」であるかの如く歪曲して考えられてきたけれども(この事自身段階に「階級民主主義」に対する連Stalinismの過渡期階級斗争の敗北に由來するものに他ならぬ)、この悪こう限界は自日本民主社日本が世界的有料的結合もせぬ。一日主に階級とリわけ「過渡期階級斗争=労働者国家との結合」の如く、革命運動内部での混乱、さら「反スパイ主義」の限界性として露呈すれば、

先進日本に臍部の我々Pr.の任務、とりわけ「国际主義的任務」、經濟的後進の被抑圧民族と先進日本に被抑圧人民の運動とハッキリと結合し、それは媒介し、Vietnamを始めとするIndo-China全域に於ける民族解放社会主義革命と世界帝国主打下に向ひた過渡的な反対主義的前形態(反対主義の任務)である事を確め、労働者国家の過渡期階級斗争を世界的な有料的關係に如何に、現実に止揚していくのかという又「3点」に於いては連は全ての斗争同志なニにこつきりと確認、このドアの言葉に心を一に固く固着しうつむけない。

「或る一定の「史的状況」には、それは革命について干通りの語り合があるかもしれない。しかし(本当に、真剣に)革命を行ふと決意して全ての人間の間に内必然的に一つの一致が存在する」——ドア

5 最後に …… 我らが隊列を創出せよ

諸君! 激動の階級斗争の渦中に在りて、僕等は、僕等自身のもの幾多の欠失、弱點を洗浄、「歴史の實力」にゆでて、ねる事は許されない。もしも、歴史に甘える様な事があつたらば、僕等は、血と血を洗う熾烈な階級斗争のその未來に於て、必ずや「歴史の敵」に復しゆうを受ける事にならう。されば、早急に克服されねばならない。

既に日暁Br.は9月に予定した成田=三里塚まで強制収用を断固やり取る決意をもつて、今着々と体制を整えつあるし、更に次期国会の「沖縄返還決定議案」批准から72年4月沖縄返還実現を強行しようとしている。(自衛隊の沖縄派兵への準備も、もう既に完了しつゝある)。僕等は4・5・6月三争の真剣な総括を踏まえ、今秋、力三争勝利に向けて強固な部隊の形成と勝ちとるべく密集した討説と本舎宿に於いて断固立ちとろうとする所である。

確実に「百の言葉」よりモーティフの実践、つまり事に基本的に誤解はない。これと「自ら知識上よく「腕力と武裝」これまでのうちとも、一つの運動が起る前には必ず「頭」に相談となりれば、どうぞい事も又明白な眞理である。討説と討論を重ねて、次の実践的往針も生まれてきたり。諸君一人一人が優秀なorganizerとなつて、人々も多くの下衆を諸君の周囲に組織させてゆくと同時に自らも又最も優秀な革命戦士へと心身ともに磨き上げていく事によつて、9月には数百、数千の末ヘルの隊列が、同志のヤング

スに地響き起つて雄々しく登場せん事を！ そして敵Br-国家奴才（…政治・公安警察、特權力隊）として底震憾せしめん事を！

Prは至るところで強く敵Brは至るところで弱くなつてゐる。 Pr人民は必ず勝利する！ 諸君！ Dare to act！

タメ 入管法案曰会再上呈阻止斗争に全の同志に決起せよ！ H
一 学女会中央常任委員会書記局 -

Memo

〔注意〕

レジコメは各自責任をもつて保管して顶くこと！

一定の期間を経れば必ず返却して顶くこと！